
KIZUNA

美波可奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K I Z U N A

【Nコード】

N 3 9 6 6 F

【作者名】

美波可奈

【あらすじ】

私は膝を抱えいつも幸せを探していた。

孤児院 1

魔王ピーシアと勇者クーランの話は案外有名で。種族を越えた愛だなんて言われてて。

勇者クーランが当時恋愛感情を持ってたかだなんて昔の話すぎてピンと来ない。
でも当時の残ってる日記みたいな書物にはピーシアの感情は書かれてる。

「私はこの人間を愛してしまった。」

一世一代の恋ってこんなのを言うんだろうね。

私もそんな恋がしてみたい。
でも特異体質だから誰も私のこと好きになってくれないんだ。

2

私が生まれたのは寒い寒い冬の日だった。
瞳が魔族と同じ紫色だったから捨てられたと聞く。
魔族は魔王ピーシアのお陰で終焉を迎えたかに見えたけど。
実はそうじゃなくて単なる「氷河期」に入っただけだった。

魔王自体の血は消えたけど。

雑魚の血は残っていて。

そしていつの頃だったか。

純粋な魔族は減ったけど。

半魔族が増え始めた。

端的に言えば人間と魔族の間の子が増えたんだ。

争いごとを好まず出来ればカスミを食べて短命だったら良い。

口癖のように魔王ピーシアは言ってたって。

そんな私に優しくしてくれるのは孤児院の園長先生ぐらいで。
本当に私って愛されない星の下に生まれたんだなって実感するんだ。

「ユリシア。」

名前を呼ばれた。

「はい。なんですか？」

「経営難で此処を畳まないといけないかも知れなくなっただ。」
それは予期せぬ話で。

「それでもう高校生にもなるユリシアから此処を出てもらっ準備を
しないといけなくなっちゃって。」

済まなそうな園長先生の顔は疲れからかやつれていた。

私はそんな事にも気づかないぐらい疎かったのかと自分を責め。

「…判りました。早急に出て行く準備しますから。」

「ユリシアは何にも望まないんだな。」

諦める事に慣れてる私は多くを望まないんじゃない。

「望んでも叶わないのなら望まない方が傷つかないで済むから。」
それは生きていく術で。

「ユリシア。」

きちんと名前を呼んでくれるのは園長先生だけだったから。

「ごめんな。」

そして私なんかに優しくしてくれて。

私なんかきちんと謝ってくれるのだって園長先生しかいないから。

「大丈夫です。私ももうそろそろ一人暮らししたいなって思ってた
んです。」

「丁度良かった。踏ん切りがついて。」
嘘。

本当はここにずっといて。
死ぬまですつとここにいて。

優しくしてくれる人が1人で良いからいてくれたら。
多くは望まないから。

学校での嫌な事だって耐えられるって思ってた。

紫色の瞳でも自分の事愛せるかもしれないって思ってた。

甘かったね。私。

足掻いても仕方ないから諦めるけど。

でもどうしたら良いの？

これからどうやって生きていけばいいんだろう？

孤児院 2

「今までお世話になりました〜。」
心にも思わず。

私は挨拶をしてトランクひとつ抱え孤児院の玄関にいた。
そんな私に園長先生はかける言葉がなくて。

済まなそうに俯いた。

「大丈夫です。私もうオトナだから。」
嘘。

本当はその手に縋りつきたいぐらい惨めで。
本当は私のことみんなと同じように捨てるの？って。
やっぱり園長先生でも私の紫色の瞳が気味悪かったの？って。

その肩を揺すって聞きたかった。
だけど出来なかった。

だって私大声あげて泣いてしまいそうで。

愛されないから愛され方も知らなくて。
だけど小さい時に捨てられた私に救いの手を差し延べてくれたのは
紛れもなく園長その人だったから。
可愛くない私を此処まで育ててくれて。
きつと感謝しないと罰が当たる。

「園長先生はこれからどうするんですか？」
やっと紡ぎ出した言葉は。
思いやりを持った言い方だった。
「多分。私も野宿かな…。」

私はその言葉を聞いて。

重大さを知った。

立ち上がり触れたかった園長先生の肩は細かった。
気づいてみれば私の方が背も高くなっていた。

「先生？私を救ってくれて有難う。」

ずっと言いたくて。

ずっといえなかった言葉。

「私住所が決まったらすぐに連絡するから。

だからそれまで頑張っていて？」

本当は私が孝行をする番なのに。

私の台詞を園長先生が取っちゃった。

「私ね。先生。此処では幸せだったよ？」

伝えたかった言葉の半分もきつと言えなかったけど。

伝えたかった。

紫色の瞳でも園長先生は愛してくれたって。

此処だけでは幸せだったよって。

でもそれは私の自己満足に過ぎなかった。

もっと早く気づいてればこんな事にならなかったのに。

優しい嘘 偽りの姿 1

本当は。

本当は魔族狩りが魔王ピーシアの時代みたいに始まったんだって。知らなかった。

魔族と人間の間の子が手を焼くほどに増えたんだって。

私のように瞳が紫色の子も。

誰かのように皮膚が緑色の子も。

魔族狩りの対象になったんだって。

園長先生は魔族狩りで命を落とす事になるであろう可哀想な瞳の色に生まれた私を哀れんで。

周囲に気づかれないうちに逃がしてくれたんだ。

私とその事が判ったのはどうにも宿が見つからずさまよい歩いて孤児院のそばを通った時の事だった。

激しい怒声が響いて。

私は竦んだ。

何なの？って。

だって此処は平和なはずだったから。でもはつきり聞こえた。

「ユリシアを何処へ隠した？」

声高く叫ぶような男の人の声。

そして姿は見えないけれど園長先生の静かな声が聞こえた。

「遠くへやりました。魔族狩りが始まるだなんてあの子には可哀想

過ぎるから。」

「……!! お前。」

「逃亡幫助は重罪だぞ??」

「判ってます。だけど。」

「だけど私は命賭けてもあの子には生きて欲しかった。」

園長先生!!

叫びたくなった。

それをぐつと堪え。

「政府の決定は絶対なのにか?」

「それでも。」

それでも私は屈しないから。

いくら私を責めても何もでない。

私だってあの子の行き先は知らないんだかつ!!!!!!」

ケンノフリオトサレルオトヲキイタ……

「全く。何てばあさんだ。」

男の声が響く。

「命かけて守っても何にもならないのに。」

おい。死体片しとけよ。」

何かを引きずる音がして。

私は吐き気がした。

頭痛がする中でわかったことは。

私は園長先生に最後まで守られたってこと。

私のせいで園長先生が殺されたって事だった。

優しい嘘 偽りの姿 2

私の瞳は紫で。

だけど誰にも迷惑をかけてるつもりもなかったし。

ましてや私のせいで園長先生が命を落とすだなんて思わなかった。

「全く最後の最後で意地を張りやがって。」

声が聞こえる。

「全くだ。何の為に孤児院の資金を援助してやってきたか判らない。魔族狩りが始まればすぐにユリシアを引き渡すと契約してたはずだ。」

「あーあ。契約も不履行かよ。」

ガー ーンと何発のも銃声も聞こえた。

「銃の弾だってバカにならないんだぜ？」

ギャハハと品のない笑い声と共にまた銃声が聞こえた。

「よっ。ばあさん。これぐらいすれば死体が上がっても身元もわからないだろう？」

「顔もうちよつとめちゃくちやにした方がよくね？」

…頭が真っ白になった。

園長先生が殺されて。

死体はめちゃくちやに？

ユルサナイ。

ゼツタイニユルサナイ。

頭に私の声とは別の声がした。

そして。

そして。

私はトランクを置いてゆつくりと声がする方へ向かったんだ。

此処で私は捨てられてた。

孤児院の桜の木の下に生まれたばかりの私は捨てられてた。

そこへ通りかかったのが園長先生その人だった。

よく覚えてるよ。

あなたが愛され方を知らない私に愛し方を教えてくれたこと。

慈しんで私を育ててくれた事。

よく覚えてるよ？

でもね。

今はそんな事どうでも良くなるぐらい復讐に燃えてしまった。

きっとあなたは自分の死を私が引きずらないようにと祈っただろうけど。

でも私。

こいつらだけは許せない。

「!!!お前!!!!!!」

「ユリシア!!!」

相手は三人だった。

銃を持った奴が二人と剣を持った奴が一人。

よく見ると防衛省の職員で軍隊だった。

そしてそいつらの足元に園長先生の亡骸が無残な姿で転がっていた。

「このばあさんもお前のせいで死ななきゃならなかったんだ。

こっちへ来い!!!」

悪びれた様子もなく銃を持ったうちの一人が私の腕を引いたから。
私は瞬間襲い掛かった。

今まで武道の経験も何もないのに。

驚くほどに体が動き。

瞬殺だった。

そして後悔する。

血塗られた手はもう元には戻らない事。

嫌というほど知ってるから。

殺人という最も重い罪をこのとき背負ったんだ。

私が殺めた軍隊の三人と同じ罪を背負う事になったんだ。

聖水

園長先生の亡骸は冷たかった。
顔もぐちゃぐちゃにされていた。

優しかった園長先生は私に優しい嘘をついてくれた。
それは私のことを可愛がってくれていたから。
嘘はいつもいけないと教えるけど。
優しい嘘は吐いてもいいと。

人が助かる嘘なら吐いてもいいと。

「ユリシア。此処へ来なさい。」

1番最初に言われた言葉は。

「ユリシア。今日からお前は此処の住人だ。」

「ユリシア。学校で色々あるだろうけど私はいつでもお前を信じてるからね。」

きつと。

私を拾って育てると決意した時。

尋常ではない反対にあったらう。

心労が尋常でなかったらうと思うのは。

私を拾ってから園長は何だか早く年を取ってしまった気がするから。

「ねえ？園長先生。

私を守るためだったんだ？」

経営難も嘘じゃなかったたらうけど。

涙で前が見えなかった。

血塗られた手で。

私は園長の亡骸を抱きしめた。

その時だった。

背中に痛みが走って。

振り向いたら軍隊の援軍が私に向かって発砲したのが見えた。

私は魔族の間の子だから。

銃では死ねない。

紫色の血を流して立ち上がる。

その時。

聖水をかけられて意識が飛んだ…。

「聖水にだけは近づいたらダメだよ。」

園長がいつか言った言葉は。

本当だった。

聖水。

近年発見された魔王ピーシアが生きてる時代の産物。

聖水は魔族の命をも溶かす神聖な水。

逆に人間にとってはありがたい奇跡の水。

「瞳の色ってね。」

いつか聞いた園長先生の言葉は私にとって救いだった。

「瞳の色ってね。血の色が映るんだって。」

だけど私はそんな事関係ないと思うよ。

ユリシアの色が紫だって私は大好き。

様は心の問題なんだから。

ユリシアの色が普通でも悪い心を持てば私はユリシアの事嫌いになるだろうし。」

「だから覚えていて。

誰があなたの事嫌つても私はあなたのことが大好きだって。
それだけでみんなのことも許して？」

だってね。先生。

みんな私のこと気味悪がるの。

何も悪いことしてないのに病原菌扱いして。

紫がうつるから近づくなつて。

だから私は魔王ピーシアみたいになりたかった。

きっと短命なことを願ってカスミだけしか食わず。

だけど無理だった。

人を殺めてしまった。

もう後戻り出来ないよ。

復讐心だけ人一倍で。

なんて弱い私の心。

きつとクラスメイトは言うんだろう。

マスコミの質問に。

あいつなら紫色の瞳をしてるからきつと殺人罪犯しても不思議じゃないって。

復讐の鬼 1

「全く何てことを。」

そんな声が聞こえたのは薄暗い部屋の中だった。
きつと牢屋かなんかで。

私の腕には手錠がかかっていた。

「……！！！！いつ！！」

撃たれた背中が痛かった。
だつてきつと。

私はこの血塗られた手を見れば判るだろうけど。
殺人罪は免れない事は明確だったはずだから。

「動かない方が良い。」

瞳を上げると門番みたいなのがこちらを見てて。
煩い。

そう思ったけどきつと無駄だろうと言わなかった。
言葉に出さなかった。

どうせ殺されるのに。

中途半端に生かしてて。

どうせなら一思いに殺して欲しかったのに。

コロサナイヨ。

頭の中で声が響く。

私の声じゃない何か。

「止めてくれる？」

私は苛立ち。

目の前の門番に食って掛かった。

ナニガ？

だって直接私の神経に触れるみたいに。

気が触れそうだったから。

「何を騒いでいる？」

いきなり声が聞こえた。

目の前の奴じゃない方から。

目を向けるとそこには一際立派な鎧を着た騎士みたいなのが立っていた。

「騎士団長！！」

目の前の奴が声を上げる。

相変わらず頭の中に響く声は。

シオラシクシテレバコイツハノウナシダカラタワイモナイカラ。
そう言った。

アザムクノハカランダカラ。

「気が付いたか？ユリシア。」

園長はお前のせいで死んだんだ。

これからはちゃんと俺たち人間の言う事をよく聞くように。
俺たちの言うまま動けばお前も痛い目見ずに済むんだから。」

こんな能無しの言うなりにならないといけないのか。

吐き気がした。

それでも。

頭の中に流れる声にかけてみようと思った。

私はまだ死ねない。

殺してくれないのなら死ねない。

もしまだ生きてるなら。

絶対復讐してやる。

復讐は何も生まないって知ってるけど。

でも許せなかった。

目の前に生きてるのうのうとした軍隊の奴らが。

復讐の鬼 2

牢屋の戸を開けて騎士団長と呼ばれた男が入ってきた。
口元にはいやらしい笑みを浮かべて。

魔族には性別がない。

だから間の子の私は一応女として数えられたけど本当は中性だった。
きつと愛する人によって性別は変わるんだと思う。
いつもいつも学校でも好奇の目に晒されてたから。

だから私はこれから起こるであろう事が容易に想像できて。
怪我をさせられるのも怖くなかったけど。
でも目の前の男が怖かった。

好奇の目に晒される事が堪らなく怖かった。

手錠は外れない。

いくら暴れても。

来ないでっ!!

叫んだつもりでも声すら出なかった。

騎士団長が私の胸に触るか触らないかの時だった。

「団長。もうその辺で良いじゃないですか？」

さっきの私の頭の中に語りかけてきた男が言った。

「折角いいとこなんだから邪魔すんなよ。」

騎士団長は意に介した風もなく。

私へ手を伸ばしてきて。

「いやっ!!!」

私は何も出来なくて。

「やめろってんだ。」

地の底から這うような声で。

その声の主は騎士団長を掴み投げ飛ばした。

「お前。訓告ものだぞ！！！！」

「じゃあ訊きますが。」

その声の主は私と騎士団長の間に立ちはだかり。

「あなたのこの行為は島流しものだと思いますが？」

ダマツテメヲフセルンダ。

また頭の中に声が響く。

私は小さくうつむいた。

ぐつと黙る騎士団長と声の主との間に妙な沈黙が流れ。

「俺。しっかりとこの眼で見ましたから。

騎士団長。あなたがこの魔族にしようとしたこと。」

凜とした声で。

その背中で私を初めて庇ってくれたのはこの声の主だった。

「嫌い！！！！ユリウス。

お前だって同罪にしてやる！！！」

騎士団長の特権だ。」

ほんの一瞬だった。

そう言う騎士団長の声が途切れ。

光がほとばしり。

騎士団長の首が飛んだのは。

「利かん気なんだよ。」

ユリウスと呼ばれた少年がこちらを振り向き。

「逃げるぞ。」

ただ一言言った。

逃亡

「大丈夫か？」

手錠を外しながらあなたは言った。

「何で助けてくれたの？」

私は死んでもいいって思ったけど。

覚悟は決めたけど。

犯されて生きるぐらいなら死んだ方がマシだと思ってたから。

オレモネ。オマエヨリイゼンカラムゾクトマゾクトヒトトノアイノ
コナンダ。

頭の中に響く声は。

私の質問に応えてた。

でも口では。

「ってか今そんな事言ってる場合でもないし。

お前のせいで俺はまた追われる羽目になった。」

違う事を言いながら私の腕をつかみ。

「行くぞ。」

舌打ちしながら外へ出て。

羽根を背中から出した。

フリークスって言うの？

呆然と腕を引っ張られながらそう思うと。

心を読んでたかのようにあなたは言った。

「俺はクォーターなんだよ。人間と魔族と魔族の間の子。

だからお前より力を持ってる。」

そして私を抱え大空へと羽ばたいた。

空も飛べるだなんて。

私はただ紫色の瞳をしてるだけで何も力は持っていないのに。

「何処へ行くの？」

「仕方ないからお前をアジトへ連れて行く。」

そこで若つてもらえ。」

「あなたは？」

「俺は軍隊だから派手に騒ぐさ。」

悪いけどお前は逃亡犯ね？」

「えええええ？」

「俺がクォーターなのみんな知らないからばれるまで軍に居て内部から壊滅させてやるつもりなん

だ。

魔王ピーシアは魔王なのに魔族の血が壊滅する事を願い、勇者クーランに思いを託したのに。

私はこれだけ生きることに抗い。

死ぬ勇気もなく。

手は血塗られて。

罪は消えず。

園長先生が命かけて守ってくれたのに、このザマで。

「私はこれからどうすればいいの？」

その答えは見つからなかった。

そして私は。

連れてこられたアジトで二十歳を迎える。
丁度その時だった。

人間が負傷したのを助けたのが。

光り注ぐ。

見た目はけっこう重傷だった。

手なんか焼け爛れて手を貸さずにはおれないほどに惨めだった。

「…君は魔族だね。」

その人が呟いたから。

「悪いかな？」

そう言つとその人は微笑みを浮かべて。

「ああ。いや。」

助けてくれて有難う。」

そう言つた。

私を助けてくれたユリウスはあの後魔族の爆撃に巻き込まれ死んだと聞く。

私はそれを聞いたとき涙すら出なくて。

何だかこうなる事がわかってたような気がして。

魔族は元々誰かを守る事はしないから。

それはハーフでもクォーターでも変わりはなかった。

誰が死のうが生きようが。

魔族には自分だけが大事で。

自分だけが富を得たら良いという思考しかないから。

穏やかなあなたは。

私へ薄く微笑んだ。

「俺はね。爆撃隊の少佐だった。

だけど内部からの反乱があつてね。

飛行機で飛んだけど撃ち落とされた。」

「争いごとに人間も魔族もないのかもしれないね。」

あなたは痛々しいその姿で呟いた。
私はどう答えていいか判らなかつた。
だって殺人犯な私は人間は「敵」のはずで。

大好きだつた園長を殺したのも軍隊の奴らで。
私は復讐の鬼と化して。
だけど復讐が何も生まないこと。
きつと何処かで知っていて。
心に残つたのは罪深さだけだつた。
人を殺めてしまったという後悔だけだつた。

園長が生き返るのなら私は人を殺めただけ罪を負っただけ報われた気がしたけど。
実際は全然そんな事なくて。
園長は生き返らなくて。
ただ残つたのは自分の血塗られた手だつた。

「君は何で泣いてるの？」
人知れず涙がこぼれる。
「俺が何か悪いこと言つたかな？」

あなたは穏やかな微笑みで。
もうきつと死期が近い。
「ごめんなさい。私。ヒーリング使えないの。」
助けたは良かつたけど。
私は紫の瞳以外人間と変わらず他のみんなみたいに力は持つてなかつたから。

「何で謝るの？君は俺を助けてくれたじゃない？
それで充分だよ。」

焼け爛れた手であなたは私の涙を拭った。

「俺ね。クーランって言うんだ。」

昔の勇者と同じ名前。

勇者みたいに強くなりたくて軍に入ったけどこのザマで。
何の為に軍隊に入ったんだろうって思った。

魔族狩りをして意味がないって知ってたのに。」

私は。

この人間を好きになっちゃった。

魔王ピーシアと同じように。

死に掛けた人間なのに。

人を殺めた血塗られたこの手で。

初めてこの人間を助けたいって思ったんだ。

「君の瞳は紫なんだね。」

魔王ピーシアの瞳と一緒に。」

私は初めて。

本当に初めてこの人間を助けたいって切に願ったんだ。
人間との絆を求めたいって本当に思ったんだ。

その時突然私の全身が光り。

クーランに降り注いだ。

傷が見る見る塞がっていつて。

私の体は光る事を止めず命が消えるまで光り続けた。

…それは魔族が人間との絆を求めた証。

私はそれで満足だった。

園長がいつか言った言葉。

「ユリシアが絆を求めたらきっと人間みたいになれるから。」
私はあなたが好きだった。

ヒーリングを使えない私が唯一出来たこと。

命を削って愛したあなたに生きる命を与えたんだ。

「君の事名前も聞いてなかったね。魔族のお嬢さん。」

「でも君は魔王ピーシアみたいに潔かった。」

ありがとう。」

クーランはその後この事を全世界中に伝えたという。

「俺の傷はね…。」

終。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3966f/>

KIZUNA

2010年10月15日08時35分発行